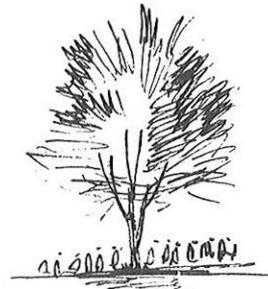


# 光の子



No.114 2005.7.1

暑中お見舞い申し上げます

おかげさまで元気に二二回目の酷暑を迎えます。今後ともよろしくお願いいたします

社会福祉法人 光の子どもの家



挿絵・中島英子

## 「パパのケイタイ」

「光の子」

炎天を流れて大河音もなし

流れゆく音明るくて水草生ふ

万緑を絞りし水を野にたたへ

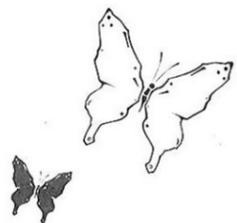
まっすぐに泳ぎて早し光の子

光の子誰もが日焼美しく

飛ぶやうに廊下を駆けて裸足かな

触るなよだが近寄れと夕焼が

落合 水尾（『浮野』主宰）



# 出会いの時に

竹花 信恵

新緑の隙間から早くも初夏の日差しが差し込む頃となりました。新年度、それぞれの場に進級進学した子どもたちは新しい環境に少しずつとけ込み始め、溢れるエネルギーを振りまいている毎日となっています。

「新しくなる」という言葉には何か素敵な事が起こりそうな予感と期待がありますが、人間関係が「新しくなる」という時には緊張と不安、時には恐れさえ感じさせられます。

私たち光の子どもの家でも人間関係を新しく創る日々となりました。様々な事情で家族と一緒に暮らせない子どもたちの「家庭に代わる生活の場」であり、「暮らし」を共に創ってきた私たちの「家」から、この春三名の担当保育士が退職し、次の仲間へバトンタッチされました。

それぞれ五年前後の月日を重ね合わせ、寝食を共にし喜怒哀楽を共有して、最も子どもと近い位置に立ち続け、寄り添い続けた担当者たちでした。感謝をもってお互いの今後の引き続く関係を願いつつの交替です。同じコースをしっかり整えて確保し、そして想いを確実に伝え、それを受け取っての

新たな日々への再スタートとなりました。

それでも子どもたちの立場に立った時、そう簡単にはいきません。玄関に寝そべり、ひっくり返って泣き叫んで別れを惜しんだ四歳の妹。そんな彼女に「また会えるよ、来てくれるよ。大丈夫だよ」と自分が泣くことも忘れ、慰め続けた五歳の姉。隣には新担当者が付き添います。

自分の担当者の退職を彼女なりの時間をかけて受け止めた高校生。担当者への感謝の思い、「大好き」というメッセージを溢れるほど伝えたくて色紙をみんなに回していました。それでも、やはり最後に顔を見ると抑えられませんか。「何で辞めるんだよ」という納得できない思い、憤りを自身の持てる表現手段の「怒り」でぶつけてきました。そんな大きな心の揺れを次の担当者たちは正面から受け止め少しずつ落ち着き、また新たな人間関係が育ち始めました。時には担当者と共に前担当者に電話をかけた手紙を書いています。位置をずらし、入れ替えて今度は力強い応援者となっていたことで、別れを失うことなく、新たな出会いを創っていくことに繋げていきます。

この家で初めて子どもと出会う入所の日、その時の風景はこの数年大きく変わってきました。涙の無い入所が大半となりました。悲しむことさえできない心の状態、といった方がいいかも知れませんが、涙を流しあえる関係を創れたこと、心が深く、細やかに育ったこと、そのことは必ず次の成長に繋がっていくことでしょう。全てを力に変えていける子どもたちになりました。

別れではなく、新たな出会いの時に、これまでの豊かな関わりを積み重ねて、これからも出会えて良かった感謝の歩みができますように、今後とも応援よろしくお願ひ致します。



## エッセイ

### ぼくのうちでは

孫の章太が時々やって来る。彼は五歳。やや都会的な土地に住んでいる。私は、章太になるべく田舎の生活体験をさせたいと思っている。そこで、彼の胸くらいまでもある雑草の中を、歩かせたり走らせたりしてみた。また、いちよりの落ち葉が一面に積もって、黄色のしとねのようになった時などには、落ち葉の上を駆けまわせたり、上の方に撒き散らせたりした。そんなものが、彼の無意識的な感覚の成長に、多少のコヤシになれば、と思っている。

そんなわけで、孫の章太が、時々我が家に親たちとやって来るのを、何となく私も家内も心待ちしているようなところがある。

或る時、お昼少し前にやって来たことがある。お昼は、娘夫婦と章太に私と家内の五人で食べることになった。

章太が一番先にやって来て、彼専用の椅子に腰掛け、テーブルに着いた。

「今日はおにぎりとおいしい味噌汁ね」と、家内が宣言した。おにぎりを作り始めると、娘たちも集まって来た。

彫刻家 中島 睦雄

テーブルの真ん中に大きな皿を置き、そこにおにぎりを並べ始めると、章太は思わず手を出して、食べようとする。家内は、さっと章太の手をさえぎって「みんなが揃ってから一緒に食べようね。」と言う。お腹の空いていた章太は、一瞬びっくりした様子だったが、つぶやくように一言。「ぼくのうちでは大丈夫なのに。」

ぼくのうちでは大丈夫。それはそうかも知れない。娘夫婦は共稼ぎであり、朝の忙しいときなどは、全員揃って悠長な食事と言ってはられない筈である。何でも良いから、能率良く食べさせて保育所へ送り込まなければならぬ。したがって、章太の疑問も充分わかるのである。しかし、自分の家の中の決まりと、一歩外へ出た時の決まりやエチケットなどを、なるべく早く教えて、生活の中で習慣化させておかなければならないと、家内は思ったに違いない。

そこで私は、ふと、或る若い大学関係の人から聞いた話を思い出した。或る大学のゼミで、合宿研修があった。宿の広間に全員集まって朝食

という時に、新入生の二、三人が、教授の前に食事が並べられる前に食べ始めようというのである。

「おい、ちょっと待ってくれ、先生と一緒に食べようじゃないか。」と上級生に注意されたの言うまでもない。

そして、みんなで食べ始めてみると、左手のヒジをテーブルにつけて、右手だけでごはんを口に運んでいた。ごはんを右側に、味噌汁を左に置いて食べているものもいたという。ホトケサマジヤあるまいし、右と左が逆じゃないかと心配になったという話である。

これらのことは、日常生活に於けるホンの小さなことであろう。しかし、日本の伝統的な習慣から考えると、やはり問題なのではなからうか。西洋料理を食べる時の作法については、テーブルマナーと称して学校で教えることがあり、簡単な一通りの作法を学ぶのである。

ところが、日本の伝統的な生活上の作法や食事の作法などについては、自分で求めない限り学ぶ機会がない。これは、それぞれの家庭で習慣化されていて、改めて順序立てて教育する必要がないからなのかも知れない。とは言え、時には、日本の伝統的な作法を知らなかったが故に、少々

まずい体験をしようということもある。

十年以上も前になるのだが、私は或るお茶の先生の所へ、何かの用事で出掛けた。先生は歓迎してくれた。そこで、茶室ではなく普通の部屋へ案内されたまでは良かったのだが、「お茶を召しあがっていただきましょう。」と、おっしゃる。私はお茶の作法は全く知らないのです、その旨伝えんと、先生は「ただ飲めば良いんですよ」とおっしゃる。私は、或る前衛画家のことを思い出していた。お茶なんて、ドンブリで飲んでも良いんだ、というような。だったら気が楽である。ただ飲めば良いんだから、私は覚悟を決めた。

そこへ、お菓子を盛った器が出されてきて、どうぞ、といわれた。私は、うやうやしくもおごそかに、一つ、二つと取って自分の皿にのせたと、慌てた先生に、「お菓子は一つなんです」と注意されてしまった。いや、どうもどうもと頭をかきかき、私は無知不明なるを恥じた。しかし、あの時は、「ぼくのうちでは大丈夫なのに。」とは言わなかったと思う。

# 2つの文化に生きる 48

日本キリスト教団東京女子  
バナー

・・・旅立ちのとき・・・

子育てが長い長い滑走路だとして、まさに我が家はその滑走路の最後の場面で、もうすぐ飛び立つ寸前である。走っているときは滑走路が途方もなく長く見え、本人はまだかまだかと窓の外を見、ほんとうにこれでこんな大きな機体が空に浮かぶのだろうかと不安になる。それでもここまで加速してしまつたら、もう、もとに戻れない。前にひたすら加速しながら走るしかないのだ。そして、もう滑走路は残り少ないと思つた次の瞬間、ふっとこの大きな機体が宙に浮く、あとは、真つ青な空の中に飛び立つだけだ。

「子育てが長い長い滑走路だとして、まさに我が家はその滑走路の最後の場面で、もうすぐ飛び立つ寸前である。走っているときは滑走路が途方もなく長く見え、本人はまだかまだかと窓の外を見、ほんとうにこれでこんな大きな機体が空に浮かぶのだろうかと不安になる。それでもここまで加速してしまつたら、もう、もとに戻れない。前にひたすら加速しながら走るしかないのだ。そして、もう滑走路は残り少ないと思つた次の瞬間、ふっとこの大きな機体が宙に浮く、あとは、真つ青な空の中に飛び立つだけだ。」

「子育てが長い長い滑走路だとして、まさに我が家はその滑走路の最後の場面で、もうすぐ飛び立つ寸前である。走っているときは滑走路が途方もなく長く見え、本人はまだかまだかと窓の外を見、ほんとうにこれでこんな大きな機体が空に浮かぶのだろうかと不安になる。それでもここまで加速してしまつたら、もう、もとに戻れない。前にひたすら加速しながら走るしかないのだ。そして、もう滑走路は残り少ないと思つた次の瞬間、ふっとこの大きな機体が宙に浮く、あとは、真つ青な空の中に飛び立つだけだ。」

「子育てが長い長い滑走路だとして、まさに我が家はその滑走路の最後の場面で、もうすぐ飛び立つ寸前である。走っているときは滑走路が途方もなく長く見え、本人はまだかまだかと窓の外を見、ほんとうにこれでこんな大きな機体が空に浮かぶのだろうかと不安になる。それでもここまで加速してしまつたら、もう、もとに戻れない。前にひたすら加速しながら走るしかないのだ。そして、もう滑走路は残り少ないと思つた次の瞬間、ふっとこの大きな機体が宙に浮く、あとは、真つ青な空の中に飛び立つだけだ。」

## 学者もどきのつぶやき 66

### 「国際舞台で活躍する若手の人たち」

山形大学 仙道 富士郎  
山形大学 大長 仙道 富士郎

学長に就任してとても淋しいことの一つは、学問の雰囲気浸る時間が激減したことである。昨年、退職した某大学の学長などは、学長になつても活発な学会活動をしてきたが、小生にはとてもそのような芸当はできない。唯一学者として認められるのは、国際的な学会誌に投稿された論文の審査を依頼されるときだけである。いきおい厳格な審査になる。学長に就任するまえは、自分の研究にかまけて、正直に言つてそんなに良い審査員ではなかつたのかも少しないが、今時は学問に接するまともない機会とばかりに、細かいところまで入念にチェックする。最近の私の審査を受ける人は気の毒である。そんな私に学会の主催の依頼があ

「学長に就任してとても淋しいことの一つは、学問の雰囲気浸る時間が激減したことである。昨年、退職した某大学の学長などは、学長になつても活発な学会活動をしてきたが、小生にはとてもそのような芸当はできない。唯一学者として認められるのは、国際的な学会誌に投稿された論文の審査を依頼されるときだけである。いきおい厳格な審査になる。学長に就任するまえは、自分の研究にかまけて、正直に言つてそんなに良い審査員ではなかつたのかも少しないが、今時は学問に接するまともない機会とばかりに、細かいところまで入念にチェックする。最近の私の審査を受ける人は気の毒である。そんな私に学会の主催の依頼があ

「学長に就任してとても淋しいことの一つは、学問の雰囲気浸る時間が激減したことである。昨年、退職した某大学の学長などは、学長になつても活発な学会活動をしてきたが、小生にはとてもそのような芸当はできない。唯一学者として認められるのは、国際的な学会誌に投稿された論文の審査を依頼されるときだけである。いきおい厳格な審査になる。学長に就任するまえは、自分の研究にかまけて、正直に言つてそんなに良い審査員ではなかつたのかも少しないが、今時は学問に接するまともない機会とばかりに、細かいところまで入念にチェックする。最近の私の審査を受ける人は気の毒である。そんな私に学会の主催の依頼があ

「学長に就任してとても淋しいことの一つは、学問の雰囲気浸る時間が激減したことである。昨年、退職した某大学の学長などは、学長になつても活発な学会活動をしてきたが、小生にはとてもそのような芸当はできない。唯一学者として認められるのは、国際的な学会誌に投稿された論文の審査を依頼されるときだけである。いきおい厳格な審査になる。学長に就任するまえは、自分の研究にかまけて、正直に言つてそんなに良い審査員ではなかつたのかも少しないが、今時は学問に接するまともない機会とばかりに、細かいところまで入念にチェックする。最近の私の審査を受ける人は気の毒である。そんな私に学会の主催の依頼があ

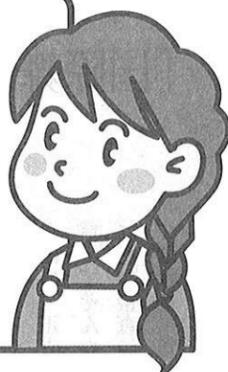




### 20周年記念特別寄稿

# ケアという概念について

評論家 芹沢俊介



ある場所で「ケアの原像を求め」てというタイトルで三回の講座を持った。昨日五月三十一日、二回目を終えたところで、この原稿にとりかかった。ということでもケアという概念をめぐって思ったことを書いてみたい。

ケアについてのいくつかの文献をあたってみて気づいたことがある。どうしたわけか、ある決定的なポイントが抜け落ちていたのである。一言でいうなら、ケアされる側の視点でもってケアという概念が組み立てられていないということなのである。すべてがケアする側の視点で組み立てられているのだ。

たとえばケアという言葉がわが国で最初に用いた本とされている柏木哲夫著『死にゆく人々のケア』を読むと、ケアとは配慮であり、配慮の内容は「その人の必要に徹底的に仕えること」と書いてある。クリスマスチャラらしい真摯なケア概念だと思う。だが「仕える」という言葉はどんなに無私であっても、ケアする側の姿勢を語るものでし

らかと思うが、子どもを主体と考えたときにしか出てこない。いかなら受動的能動という姿勢である。イノセンスとは、いまここで自分が自分を受けとめきれない状況に置かれたとき、受けとめきれない自己の状況を、誰かに受けとめてもらいたいと思う、その心のあり方（欲求）を指している。その心のあり方はさまざまなかたちで表出される。ここでの誰かは、むしろ子どもが決める誰かであって、誰でもいいわけではない。そして私が最終的に思い描いていたのは、自分で自分を受けとめることができるようになること、すなわち自己受けとめということであった。

自己受けとめは、イノセンスの表出を受けとめられた——繰り返し受けとめられた——という体験を通してしか獲得できない、というようにも疑い得ないことのように思われたのである。

たとえば里親里子の関係で、ふだんは里親をおばちゃんと呼んでいる幼児が、存在の不安にさらさ



かない。

名著の誉れ高いミルトン・メイヤロフの『ケアの本質』をめぐって見た。するとこう書いてあった。ケアは他者の自己実現をたすけることである。メイヤロフは続けて、この過程がそのままケアする側の自己実現につながると述べている。少し納得できる。したがって私には、メイヤロフの視点が柏木よりも少しだけ好ましく思える。理由は明瞭で、「たすける」という言葉に現れているように、主体はケアされる側であることが打ち出されているからである。ところがせっかくケアされる側の主体性に触れて置きながら、メイヤロフの論

れると「ママ、抱っこ」という表出をとることは知られている。こちらの施設でもめずらしくない光景であろう。この場合、甘えたいという欲求が、受けとめられれば、子どもは安定を取り戻す。イノセンスの表出は受けとめられれば、解体する。イノセンスの解体された状態、この安定状態を、私は自己受けとめができている状態とみなしている。イノセンスの表出は、自己受けとめをを目指す無意識の行為であり、したがってうけとめられなければならぬ、というのが私の子ども論、養育論の根本的な趣旨なのである。

何をいいたいのか。対象関係論的視点すなわち一対一の関係の中で起きるイノセンスをめぐるとこのドラマを、養育を含むケア概念の根底に置く必要がある。——

ここからならケアという概念を受けとめという視点から再構築できそうに思えるのだ。

ケアの概念はいまいきわまりない。しかし、自己受けとめを目

述は「たすけられる」側に向かわず、「たすける」側の位置に戻ってしまうのである。

いいところまで行ったのに、残念だ。そう思ったのだが、いや、待てよ、と立ち止まった。私の胸に、ここにはケアという概念の根本的な欠陥があるのではないか、という直感が走った。他者への働きかけだけが走っていて、はたらかけられる側のいとなみの姿が隠されている。

この直感はずぐに、養育論に一貫した子どもの視点で組み立てられたものが皆無であることと結びついた。

私自身これまで二十数年にわたって、子どもの暴力の全面肯定を核に子ども論、養育論をくみためようとしてきた。子どもによるイノセンスの表出と特定のおとなによるその受けとめ、そして受けとめられることによって子どものイノセンスが解体に向かうという論理を作った。子どもの暴力にあたるのがイノセンスの表出である。受けとめ（＝肯定）という視点は明

指す無意識の行為を自己ケアというように置き換えれば、ケアという概念のぼやけた輪郭が少しは明らかになってくるように思えないだろうか。

私なりにケアを定義してみた。ケアは、他者の自己ケアをたすける行為である。

自己ケアを妨げるようなケアは、ケアでない。しかしケアは自己ケアという視点を最優先する観点がないかぎり、ケアする側の自己都合をかぎりなく拡張していくだろうことも予測できる。そしてこの予測は、——養育——の現状そのものなのである。



# プルーム

## 別れ…そして出会い

私はこの春、光の子どもの家を退職いたしました。子ども達と一緒に過ごしてきた五年間を振り返ると、言葉では言い尽くせない想いで胸がいっぱいになります。

子ども達にとって少しでも役に立ちたい…と願いながら光の子どもの家に初めて足を踏み入れた日のことを、今でも鮮明に覚えています。季節を重ねる度に子ども達の笑顔や成長にいつも私自身が助けられているということを、嬉しくも申し訳なく感じております。

いろんな出来事があり、泣き明かした夜も少なくありませんが、そんなことも含めて、光の子どもの家で過ごした時間、子ども達と出会えたことは私にとって大切な宝物です。これからも子ども達のことを、光の子どもの家のことを想い、支えていける存在となっていきたいと思っております。

今まで暖かく応援してくださった皆様、ありがとうございます。そして今後もどうぞよろしくお願ひいたします。

服部 沙絵子



日を増すごとに確実に夏に近づいていると感じるこの頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。「夏」といえば子どもたちの大好きな季節です。「暑い！暑い！」なんて言いながら、元気に遊びまわりプールや海、山などとびきりの笑顔に出会えるのです。

私は私事のため前年度三月を持ちまして退職させていただきましたが、暑くなるにつれ子どもたちの夏の笑顔を思い出します。笑いあり、ケンカあり、涙あり、感動ありのひと夏は子どもたちを大きく成長させ周りの大人たちはくたくたになりながらも、心にふと温もりを憶えたものでした。

今、子どもたちと離れてみて初めて「もっとうすれば良かった」など自身を振り返り反省すること

が多くありますが、一番の想いは感謝です。この子どもたちへの感謝の思いは消えることはなく、これからも何もできない自分ですが一緒に時間を過ごしてくれた子どもたちへの大好きな想いはテレパシーで伝え続けていきたいです。



北谷 優佳

艶やかな花々が咲き乱れ、新緑が鮮やかな躍動感溢れるこの季節、皆様いかがお過ごしでしょうか。

三年という短い月日はありましたがお世話になりました。光の子どもの家での生活は「気づき」の月日であったと思います。今まで深く考えてこなかった「生活」について気付かされ、考えさせられました。ちよつとした心遣いと心が込められた手作りの一品だけで心が潤う、豊かな生活が送れる、そんな生活術を学びました。

大波に背中を押されているよう

はじめまして。

四月からこの光の子どもの家でお世話になっております。鈴木晶子と申します。

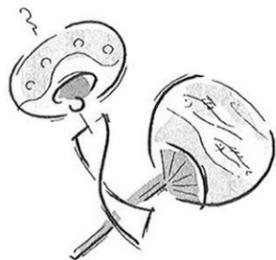
私のいる原田家は、他の家に比べて大きな子どもが多く、ほとんどの子どもたちにとって、私は「お母さん」よりも「お姉さん」に近いようです。実際、日々の生活は子どもたちに助けられ、支えられて何とか成り立っている状態で、今の私は「お母さんがわり」からは程遠く本当に頼りない存在なのだと思います。

しかし原田家の子どもたちは、そんな私を受け入れ、向き合ってくれるとても逞しく心の強い子どもたちばかりです。彼等に感謝することをいつも忘れずに私も「お母さん1年生」として、子どもたちと一緒に成長していくことができればと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

鈴木 晶子

今年度から光の子どもの家の栄養士として勤務することになった佐藤優です。

光の子どもの家で働くようになって二ヶ月が経ちました。よく周りの人に「仕事は慣れましたか？」



佐藤 優

と質問されます。でも、まだ微妙なんです。ここは仕事のマニユアールの状況判断が必要で難しいです。私は不器用なので、自分のしている事に対して「これでいいのかな？」と心配でドキドキしながら仕事してきます。毎日、何か一つは「失敗したな…」と反省しています。でも、みんなの「大丈夫だよ」という言葉にすこく励まされています。この家は大人も子どももみんなニコニコしていて、その笑顔を見るたびに、「頑張らなきゃ！」という気持ちになります。

一日も早く、この家の生活に慣れて、家族の一員になることが今の目標です。精一杯、頑張りますのでよろしくお願ひします。



山口 麻衣子

これからも末永いご愛顧を。お世話になりました。

本年度より光の子どもの家の職員となりました牧野由紀子と申します。

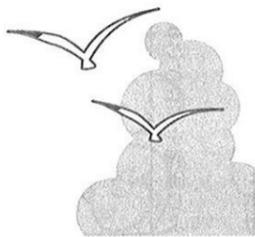
神奈川県横浜市からこの光の子どもの家へやってきて一ヶ月半が過ぎました。一面の田圃、自然いっぱいに囲まれた家で子どもたちのエネルギーを感じながら生活しています。

毎日があつという間に過ぎて行き、つい最近まで学生であったことがとても前のことのように感じられます。先輩の職員の方々に助けられながら、やつと生活の流れをつかめてきましたが、まだまだ子どもにも振り回されるばかりで、子どもたちからエネルギーをもらうことより吸い取られている状態です。

子どものために今自分に何ができるかを考えながら、子どもたちの生活の場であるこの光の子どもの家に徐々に溶け込んでゆけたらと思います。そして、子どもたちのエネルギーを自分のものに換えられるようになれたらいいなと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。

牧野 由紀子

私は、四月より光の子どもの家



田口 貴子

子ども達と向き合う中、自分の判断力の無さや未熟さを痛感しています。彼等の笑顔を力にして自分も成長していくことができればと思ひます。どうぞ、よろしくお願ひします。

# 家族に関わる その7 菅原 哲男

珠恵は、それまでの暮らしからここで暮らして適応するためのかなりの混乱や抵抗を、特に母親や継父に対して、それから数ヶ月後に、実母や継父が珠恵の光の子どもの家への入所を秘匿していたことで、孫が気になり、相当な苦勞をして探し当ててきたという祖父への態度で示した。

「何でもここでやってくるの、私は私の暮らすところを自分で見つけてここに居るのに、ほっといてくれたらいいのに！」と祖父に、実母には、「あんたは何なのさ、私のお父さんにもあいつみたいにしてきていたら良かったのに、今頃ノコノコきて欲しくないから帰って！」と、とうとう強引に返してしまっていたのであった。

それでも私たちは、実母と継父、妹、異父兄弟が暮らしている家庭を訪問して、珠恵の生育過程の情報を求め、現在の心のありようについて説明をして理解を求め、今すぐにはないだろうがいずれ実母や継父の協力が必要になること、その時からの関わりでは必ずあわせが困難なことなどを整理して伝えた。また、これまで自分の思いや願いを口にすることも出来なかつた珠恵

が表現できていることなどを評価しようと勧めた。

そんな私たちの説明やすすめを実母はよく理解し、自分が珠恵に充分でなかったことなどを顧みるようにもなっていたのである。継父が実母を愛するほど、その愛する者が他の男に産ませた子どもは決して受け入れ易いものではないこと、良い父親になってやろうとかなり無理をしてくれていること、無理をすると結果を求める性急さが表現されること、その結果としてその子どもは強情で分らない、悪い子と認識される、そうすると「よい子」にしなければならぬという強迫めいた責任感から子どもに強く当たってしまうことなどを丁寧に、理解できるように内省を含めた振り返りを促していったのだ。

珠恵には二週間ほどの間隔で実母は会いに来て、珠恵の暮らしている家で食事と共にし、外出しては体育館でバスケットに興じて帰って行った。二ヶ月後には妹と異父兄弟も連れてやってきて、家のみんなと遊び、おやつや食事を楽しむようになっていった。珠恵は次第に落ち着きだして中学で

は、バスケット部で活躍していた。そんなある日、やってきた実母が、「私はあの子の何なのでしょう？」と思いを詰めた表情で問いかけてきた。「私はあの子の母親としてしなければならぬことを何もしていない。やはり引き取って一緒に暮らしたい、それが親として当然の役目ではありませんか。私にはあの子があなたの方とまるで親子、いやそれ以上に信頼し、安心しきついているのを見て、嫉妬さえ感じます。そんな状態に耐えられません。」と涙を流して訴えたのだ。

夫の子が憎らしく思ってしまう」などと相談してきた。それは自然な情緒なのだろう。でも先夫の子・珠恵の妹のためには良くないこと。それが高じるとネグレクトや虐待につながっていくおそれがあることなどを説明した。

## 現場から

### 続・光の子らしく

17

岩崎 まり子

小さな稲をなでながら水田を渡る風。ボビーの咲く通学路でさくらんぼをつまむ小学生たち…。美しい季節になってきました。

皆様、いかがお過ごしですか。先日は、また性懲りもなく、竹田兄妹が家庭復帰した母宅へ行ってきてしまいました。電話をしても留守電だったので、今日お宅へ伺ったこと、近所で時間を潰して待っていること等のメッセージを入れ、小一時間待ちましたが連絡はありませんでした。帰り際、あきらめきれずに「最後の一回」と念じながらかけた電話も留守電になってしまい、重い足を引きずりながら帰ってきました。

竹田兄妹は七年前に兄が、六年前に妹

が母宅へ帰りました。各々入所して三、四年が経っていました。体中に入れ墨をした夫の暴力から逃げようにして家出、兄妹を入所させた母は、当初も顔面に大きなアザをつくっていました。

母の抱える膨大な負債への対策、兄妹の不安定さに対する共通理解、また、仲違いしていた東北の母方実家へも家庭訪問をして和解のプロセスを共有すること等、課題を一つひとつ共に乗り越えながら実現させた家庭復帰でした。ですから、私としても、あの当時の達成感や責任の重さは忘れられるはずもなく、いつも気になり、一年に一回以上、子どもたちに誕生日プレゼントを贈るなどしながら連絡を取り合っていました。

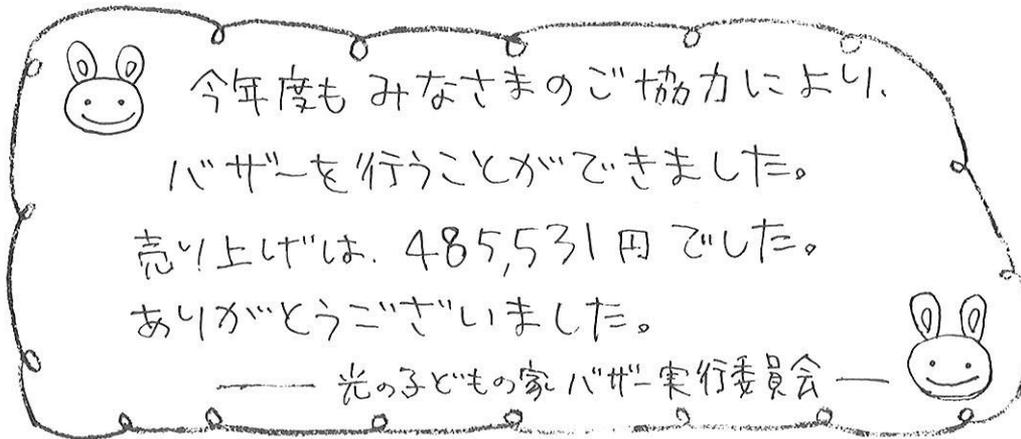
「お節介だろうな」とか、却って迷惑かもしれないな」と思わないわけではありませんが、それよりも大きな動機が私を動かしていました。

母からの連絡が間遠になり始め、私の「動機」も萎えそうになった頃、今度はいかなる大変なことになっているのではないだろうか、という大きな不安、危機感に突き動かされるように母の実家へ手紙を出したり、今回のように収穫のない家庭訪問をしたりしました。菅原施設長からの「全く意味のないことじゃない」という言葉が救いでした。

## ほんわ家族



「それは、行くところまで行ってしまったという兄についての母からの絶望的な SOS 発信でした。出張中の施設長と至急連絡をとり、母とつなぎ一応の決着を



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2005年2月1日▶3月末日

2005年2月

幼児10名小学生13名中学生8名高校生6名措置外4名計41名

- 1日 光の子どもの家の設立準備の最初から熱心に関わって下さり、開設後は嘱託医として労して下さいた田中春女先生の召天一周年を記念して礼拝を捧げ全員で先生を偲びながら夕食会  
中三女子入所市川保育士担当
- 2日 埼玉県立高校入試前期試験3名が挑戦
- 9日 加須ライオンズクラブ様ご招待で映画「石井十次物語」を鑑賞 感動に一夜 感謝
- 埼玉県立高校前期試験合格発表 1名合格
- 13日 武富士バンブー様ご招待でバレーボール観戦へ感謝
- 14日 個別自立支援計画の総括開始
- 17日 千葉県児童福祉協議会より30名来訪見学
- 23日 東京新聞による取材
- 24日 田村様散髪ご奉仕 感謝
- 埼玉県立高校後期入学試験 3名が挑戦
- 27日 埼玉県信用金庫様ご招待Jリーグ試合浦和レッズ対ザスパ草津戦観戦 感謝

<2月の物品ご寄贈者>

(株)ステラ 小島賢次 立正佼成会 野本百合子 加藤かおり 川口ふき 松本明子 他多数の各位様

3月

- 4日 埼玉県立高校後期入学試験合格発表 全員合格の快挙 夕食時に家族やお世話になった教師ボランティア全職員などが駆けつけて下さりお祝い会
  - 5日 ヒロミ高校卒業式 決定している就職へ向けて準備 児童福祉法が保障しているはずの措置延長は厚労省課長通知によって障害などの重篤な困難が条件で利用できず 法人がサポートする
  - 7日 2005年度自立支援計画開始
  - 11日 一雄高校卒業式 自立に10年からのケアや医療が必要なため児童養護施設での2年ほどの措置延長では対応できず申請せず、関係機関の努力でも居場所が定まらず措置延長となる行政矛盾
  - 14日 2005年度事業計画開始
  - 15日 大利根中学校卒業式 華美 香奈 乃衣 有紀
  - 19日 大利根藤幼稚園卒園式 丘実 潤 美也子 未央 第8回出発の会
  - 26日 第76回理事会(計画・予算)理事を交えて夕食会
  - 31日 北谷優佳保育士・山口麻衣子保育士退職
- <3月の物品ご寄贈者>  
仲矢恒代 松本明子 藤田 杉山登美子 横村スミ子 宝月寿子 梅沢ヨシコ 他多数の各位様  
感謝してご報告致します。(くら)

////// ———— [反] [射] [光] ———— ////

☆梅雨晴間の強い日差しに本格的な夏を確かめさせられます☆この国の子どもたちの置かれている状況の厳しさが増し加わる中で、久方ぶりの現役、積みどり臨床心理士の婚礼という祝福のなか光の子どもの家全体が浸っております☆結婚はこの子どもたちにとって関わるものの退職を意味することが大半でした☆一男一女が標準化した家族単位は結婚は配偶者のどちらかの父母の地域で共に暮らすことが現実だからです☆辛い積はしばらく仕事を継続することめでたさもひとしおなのです☆八年間にわたり続けて下さいましたバーガー京子氏の無償の連載をひとまず区切ることにしました。深謝あるのみです☆創立二〇周年を記念し芹沢俊介氏の玉稿で小紙を飾る幸いを得ました☆子どもの位置からの養育論の追求は私たちがこの二〇年続けた課題でありました☆多くのお交わりが子どものための子ども施設創りの土台でした☆その完成へ向けた取組みを更に目指します☆乞うご支援！ (哲)